名古屋陵水

発行所
陵水会名古屋支部
名古屋市中村区栄
4丁目21番11号
㈱サンワ内
TEL052-241-0151
FAX052-261-5715
発行責任者　岡田　一
印刷所　中埜総合印刷
☎0569(21)2426㈹

名古屋支部総会
立食パーティー大成功

桜前線も通過した平成11年4月16日(金)に、名古屋駅にほど近い名鉄グランドホテルにおいて、恒例の陵水会名古屋支部総会が開催された。

長引く景気低迷状態の中で、例年並の出席者数が得られるかどうかの不安はあったが、定刻前にはホテルのロビーは大勢の人で混雑し、大学からは加藤学長、吉田学部長、陵水会からは吉田理事長、大阪・岐阜・浜松の各支部長をご来賓としてお迎えし、賑やかに開催することができた。

第一部の総会は、岡田支部長（大3）の挨拶、来賓のご紹介、加藤学長からの来賓代表祝辞に続いて年度の支部会計報告を承認して、型通りに終了した。

このあと吉田経済学部長より、今年大学創立50周年を迎えるという節目の時期に当たっての、経済学部の近況などについてご講話をいただいた。

経済・経営の2学科合計定員約140名の時代から、管理科学科はじめ6学科、定員550名規模にまで発展した経過をたどり、少子化時代、価値観の多様化、若者気質の変化、国立大学の民営化問題等様々な環境変化に揺れる「象牙の塔」の課題の多い近況と、対応策模索のご努力等の話が聞く者に強い印象を与え、それぞれが彦根で学んだ頃を思い出しつつ、より一体感を強める有意義なお話しであった。

加藤学長の祝辞

引き続き場所を変え、立食パーティー形式で開催された第2部の懇親会は、地元テレビ局の美人アナウンサーの軽妙な司会進行で、賑やかに進められた。

吉田理事長の祝辞、樋口名誉理事長からの祝電紹介、7名の新入会員出席者紹介、支部顧問で高商21回の井澤氏の発声による乾杯のあと、陵水会70周年記念で製作・発売されているCDの校歌・寮歌がバックで流れる中、会食・懇談が始まった。

はじめは年次毎のテーブルでの懇談となったが、「陵水亭」と称して支部長・幹事長を中心に月例の懇親・会食会を開催するなど日頃の地道な活動の成果もあって、会場は和気藹々の雰囲気となり、次第に年次を越えた懇親の輪が拡がった。

途中、リストラだの失業率の記録更新だのと厳しい話題の続く経済環境の中にあって、開幕以来快進撃を続けて明るい話題を提供している地元球団の中日ドラゴンズが、この日も巨人を相手に圧倒的に優勢にゲームを展開しており、開幕以来連勝のタイ記録達成も間違いないという状況が報告されると、場内は歓声に包まれる場面もあった。

宴もたけなわとなったところで、東証平均株価予想の上位当選者表彰、全員による校歌・寮歌の斉唱、次回当番幹事の決意表明、吉田幹事長（大8）音頭による万歳三唱で、予定時刻をややオーバーして盛会裡に終了し、来年度の再開を約束しつつ散会した。

（大12　水野浩記）

3　論壇　FACE TO FACEの大切さ
3 4 5　経済学部の近況
6 7 8 9　特集　21世紀を生きる

受取 11.11.8. 陵水会

あいさつ

名古屋陵水会員の皆様へ

支部長　岡田　一

陵水会名古屋支部の皆様には、ますますご健勝にてご活躍のことと思います。日頃は、当支部の運営にご協力を頂きありがとうございます。

大変おそくなりましたが、四月十六日開催の今年度の名古屋支部総会には、お忙しい中を約百五十名という多勢の会員のご出席を得まして盛大に開催することが出来ました。誠にありがとうございました。年々総会出席者も増えて、ますます盛会となっていることは大変喜ばしく、これも偏に年次幹事の皆様の絶大なるご尽力と、会員一人一人の陵水会ひいては母校に対する熱い思いの結集によるものと、改めて感謝の意を表したいと思います。

あいさつする岡田支部長

近年陵水会は、吉田理事長のリーダーシップの下、各支部ともその活動が活発化してきておりますが、中でも当支部の活動につきましては、他支部の注目の的になっているところであり、今後とも皆様方のご協力を得て、引き続き支部活動の活発化を図りたいと考えています。

さらに、加えて、陵水会本部会費の徴収状況を見ると、当支部の実績が最も優れており、本部の財政基盤の強化に大きく貢献しており、これもまた支部会員の皆様方のご協力によるものであり、重ねて厚くお礼申し上げます。

さて、先般の支部総会での加藤学長の近況報告にもありましたように、このところ国立大学の法人化の問題が国の行・財政改革、教育改革の一環として議論されてきております。ご承知のように、これは国立大学を国の直轄運営から切り離して、独立した行政法人に改組しようとするものでありますが、これに対し国立大学協会を中心として大学側の意見の取りまとめが行われてきたところであります。新聞によるとこの程国大協の委員会が報告書を取りまとめ、近く文部省に提出されることになったようであります。

規制緩和、行・財政改革の流れから見て、国立大学のみ旧態依然たる体制は許されない所であり、大学の自治、学問の自由の原則を守りつつ、民間企業経営の手法を取り入れた法人経営に脱皮するための産みの苦しみを続けているのが、我が母校を含む国立大学の現状のようです。

日本の人口は二〇〇七年頃をピークに減少に転じ、加えて、世界で初めてと言われるスピードで急速に高齢化していきます。さらに、大学進学率も徐々に大きくなり、やがては全入学希望者が大学の入学者定員を下回ることになり、大学間の競争の激化は目に見えております。大学が学生にとり魅力あるものであり、その地域にとり真に有用であり、国にとって明らかに存在価値があるもののみが存続出来る時代になります。

母校滋賀大学も、当然こうした流れを見据えて、着々と新機軸を打ち出しており、中でも、産学一体の教育を充実させるべく努力しておられるよう聞いております。その一環として、十月からアサヒビール㈱の寄付講座が開設され、最終講として陵水会名誉理事長樋口広太郎氏の講義が予定されているようです。また、続いて日本生命保険㈱の口座も開設される予定と聞いています。陵水会名古屋支部としても、折角会員相互の交流が活発化しており、同窓生としての団結心も高まっている所でもあり、我々の出来る範囲で何か母校の為にすることはないかこの際考えて見ることも必要ではないかという気がします。

最後になりましたが、さしも長引いた平成不況も底を打つ気配が見え、経企丁の発表では、四―六月期のGDP統計値は年率換算で〇・九%となり、このまま順調に推移すると政府公約の〇・五%成長は達成出来るといわれています。とは云うものの、景気の回復は業種によりタイムラグがあり、私自身まだそのような実感は持っていませんが、しかしさすがに夜明けは近づきつつあるような兆候は現れています。

会員の皆様のなお一層のご健勝をお祈りいたします。（11年9月記）

論壇

FACE TO FACE の大切さ

名古屋銀行 専務取締役（大17）　簗瀬悠紀夫

今から40年前の昭和34年9月26日の土曜日、名古屋地方は史上希に見る強烈な伊勢湾台風により甚大な被害を被った。その当時、私はまだ中学2年生であったが、銀行の社史を紐解くと35ヶ店しかなかった私どもの銀行の27の支店で大きな被害に遭っている。港に近い一番酷い店では何日間も2メートルほどの浸水が続いた。創業して10年経ったばかりの小粒な金融機関ではあったが地域の金融を担っているという使命感がこうした甚大な被害をもたらした台風の直後の大混乱をものともせず各方面に手を尽くし、お取引先の利便を最優先にと台風の2日後の28日の月曜日には営業を再開させたという記録が残っている。大災害の中であるのでともすれば自身を守る事だけで精一杯の中、困難を克服して迅速に営業再開にこぎつけた当時の役職員の苦労が偲ばれるところである。お取引先においては台風で取引印鑑が紛失、証書類も流出。銀行においても印鑑票、約定書、今までの取引の記録なども水に浸かって役に立たない状況に追い込まれた。そのような苦境を短時間に乗り越えられたのは日頃から顔と顔を合わせ親しく、時には鎬を削るような緊密な取引をしていたからである。このためいざという時にも得意先係、窓口担当者、支店の役席、本部の役員などがお取引先各社の社長、役員、経理の責任者を身近に存じ上げていた。個人取引についても本人の確認が容易に出来た。融資の実行や預金の払い出しの際に必要書類が不備の中でも大きな問題も無く、急場の災害復旧資金や当座の生活費をご用意することが出来、お取引先にお役に立てたのである。

当行は今年の12月で創立50周年を迎える。40年前の迅速で適切・親切な対応が評価されたものであろう。今日においても特に名古屋の南部地区では他の金融機関を凌ぐ高い取引シェアーをキープしている。伊勢湾台風での経験がその後の当行全体の発展に大きく関係したものと思う。地域の金融機関として、常日頃からお取引先の"顔"が何時でも分かることが我々の財産でもあるし、そうしたお付き合いをしていなければ地域金融機関としての存在価値が希薄になるのではないか、また、そのようなお付き合いを通じてこそお取引先の皆様と共に発展してゆく道が拓けるものと思っている。

金融ビッグバンが始まってから銀行を取り巻く環境に大きな変化が生じてきた。銀行の破綻、銀行間の吸収・合併、業務提携、他業態との連携など日々マスコミで報じられている記事は多方面にわたる。銀行取引の形態についても対面取引からATMなどを通じた機械化や、インターネットバンキング、テレホンバンキングなど取引チャンネルの多様化は日進月歩である。こうしたIT（情報技術）のメディアを通じた取引がごく日常的なこととなって来ていることを否定する気はないが、目と目で感情が通じ合い生きた情報を直にやり取りする事のできる　FACE TO　FACEの関係を大切にする気持ちは21世紀の時代に入っても一層価値あるものになってくるものと信じている。

記念講演

経済学部の近況

経済学部長　吉田稔教授

今年も盛況の名古屋陵水にお招き頂き光栄であります。今経済界は大変な時期を迎えているようでありますが、大学も今大変な冬の季節を迎えております。最近は卒業式等でおめでとうというのがためらわれるのです。とくに教育学部では、少子化の影響で、教育委員会に教員として正式採用になった学生は15名というありさまです。教育学部の卒業式に招待されましたが、女性の多い学部で華やかではあるのですが、なんという挨拶をしていいのかわかりませんでした。経済学部ではまだそれほどではありませんが、新しい市場をどんどん開拓せねばと就職委員の先生たちは危機感を強めております。

いろんな年代のかたがたがいらっしゃるこの会場で、何をお話ししていいか迷うのでありますが、今年で滋賀大学は50周年を迎えます。この50周年の区切りを迎えるにあたり、滋賀大学では5月に式典を計画し、新しい滋賀大の校旗やバッジ等エン

ブレム等が決まります。またこの企画にはお金がかかりますが、陵水会からは過分なご援助を頂きましたことをまず感謝申し上げたいと存じます。

またここに列席しておられる吉田陵水会理事長の大変なご尽力で、アサヒビールのスタッフによる経営学の講義が開かれることになりました。これは50周年記念事業でありまして、同窓会と大学が一体となって行う講義であります。これは全国に例のないことでありまして、陵水会の皆様の愛校心に心から感謝いたしたいと思います。ご存知のように、陵水会名誉会長の樋口広太郎氏が超多忙な方なのでこの講義が実現するのかどうか気をもんでおりましたが、樋口大先輩の鶴の一言で実現しました。私も毎晩アサヒを飲んで願をかけておりました。体重はこの1年で大幅に増え健康診断ではいつも引っ掛かっておりますが、今は満足しております。

またこれを機会にして、陵水会のホーム・ページが開設される話がまとまりつつあります。大学と陵水会の一体化が進んで、新しい共同体の形式がインターネットを媒体として実現しようとしています。このことは、大学だけではなく、皆様方OBにとっても好都合なことなので、私どもとしても陵水会のホーム・ページのために、今までのノウハウを投入し、最大限尽力させていただく所存であります。

さてこの50年は経済・経営の2学科、学生定員は140人ぐらいから、管理科学科、会計学科、ファイナンス学科、社会システム学科の6学科、学生定員は550名を超えるにいたり、国立大学の経済学部としては全国一の規模を誇るにいたりました。経済学部は文部省の優等生として、つねに時代の要請を敏感に察知して、新しい学科の設置に邁進してまいりましたが、その結果、もっとも総合的な経済学部であり、いわゆる総合大学の経済学部よりはるかにいろんなタイプの教官に接する機会のある学部であると私どもは自負しているのであります。大学院も充実してきました。ちょっと商売気を出して恐縮でありますが、とくに実業界の第一線を退かれた方々には、母校の大学院へのご入学をお勧めいたします。修士号の取得を目指して、第二の知的に豊かな人生を目指されてはいかがでしょうか？

ここまでは高度成長の時代であります。この当時の学部長は忙しかったけれど、みな幸せでありました。学部長になって健康になったという人が何人もいました。ところが満つれば、欠ける。少子化とか国家財政の赤字、国立大学を取り巻く環境が悪化すると、この豊富なメニューのある充実した学部は一転して不健康な肥満児扱いされるような気配を感じる今日この頃であります。

これからは大学にとって面白くない話であります。国立大学の授業料は年々上がって来ております。授業料がただ同然に安いことは、学生のエリート意識を満足させるものでありました。なんとなく国立大学という信仰がございます。授業料等の特典が、学生に国から期待された存在であるという意識を持たせてきたことは確かであります。これは国にとっても悪くない投資であります。

国立大学のせいで国家財政が赤字になったわけではありません。ただスケープ・ゴートになりやすい存在ではあります。国立大学は圧力団体であったことは一度もありません。したがって国立大学をエージェンシー化あるいは民営化しようという話がでております。これは問題があるということで、数年先送りになりましたが、さらに国家財政が悪化することは必至ですから、またこの問題は再燃しそうです。皆様方の母校が私立大学になる可能性はあります。しかしながら、これだけは避けなければいけませんから、われわれはいろいろ改革の努力をする必要があり、事実努力してきました。改革によって民営化を阻止したいということで、私達は今必死であります。

大学審議会の答申で求めているものは民営的な意識、組織であります。受験雑誌に広告が出てないから、国立大学は良い大学なのだという時代はおわりました。悪い大学だから広告に大金をかけているのだというように思う時代はおわりました。滋賀大学にも企画広報室がこの四月から発足しました。

そもそも大学は、王様とか皇帝といった世俗権力と社会権力からは独立した存在として誕生してきました。現代的に解釈すれば、政治家や資本家から独立していなければならないわけです。世界が変って来れば来るほどこの態度はかたくなに守っていかなくてはならない。この態度を崩したら存在理由を失うという考えが根強かったのであります。これは哲学を万学の女王としてきた時代

ならともかく、実践的学問を目指す経済学部には合わないことは確かであり、プライドばかり高い教官がいたことも事実です。

そこで大学の先生の教育について改善するよう努力しなければいけなくなりました。教育方法について先輩教官から助言をうけることになりました。また他の教官が聴講に来るようにもなりました。生徒から授業の評価を受けるようになりました。散々学生を罵っていた教授が学生から評価されるようになったわけです。学期の終わりは学生だけではなく、教官にとっても憂鬱な時期になりました。

教官も、実業界から招くようになりました。実業界からの転身はずいぶん多くなりました。皆様も大学の教授に変わりたいと思っていらっしゃるかもしれません。今はキャリア・チェンジの時代であります。将来的には、滋賀大学の教官の半数ぐらいは、実業界から、あるいは、外国人、あるいは女性であるという時代が来るとおもっております。皆様も将来設計のなかに大学教授ということも含められてはいかがでしょうか？

組織のあり方も会社組織を手本にするようになりました。大学は個人個人の教官が個室にこもって研究しており、隣の部屋からは雑音が聞こえないようになっています。ことほど左様に、それぞれの教官はまったく独立した人格を認められており、他人から干渉されないが組織制度上保証されています。この制度には利点があり、私もこの制度に強い愛着をもっております。しかしこの制度は極めて民主的であるが、決定が遅く、この激動の時代には合いません。民主的な性格を保持しつつ、会社組織の利点を活かすべく努力しております。この点陵水会の諸先輩からのご忠告があれば、大いに助けになります。

会社には有価証券報告書というものがあります。業績を発表します。公認会計士の監査をうけ、格付け機関の評価を受けます。大学もどれだけ教育サービスをしたか、どれだけ地域に貢献したか、どれだけ研究業績をあげたかを公表しております。もうすぐ、第三者機関による大学評価が始まるでしょう。会社で利益を上げれば、資本調達も、今後の商売も容易になり、従業員の給料も上がり、重役さんの報酬もあがります。大学でも第三者評価機関の評価が高ければ、たくさん研究費がもらえ、大学はますます良くなっていくというシステムになりそうであります。

今のところ、情報公開が求められてきています。友人に教えてもらってそっくり同じ答案書くことがあります。両方とも不可ならいいんですが、教えた方が可で、教えてもらった方が優になっていたなんてことは私の学生時代から良く聞く話でした。これも開示を求められたら、先生はそれに対応しなくてはなりませんでした。

まだ製造者責任までは聞いておりません。俺は頭が良かったが、滋賀大学に入ってから、さえなくなり、最近会社を首になったということで訴えられたり、経営学の先生の言うとおりに経営して会社をつぶしてしまったとかいうことで訴えられるという話はまだ聞いておりません。その点だけでも大学は民間企業よりは楽でしょうか・でもそんな時代の来ることを覚悟はしております。授業は三日やったらやめられないというのは昔話になりそうです。

個室を好み、他人の干渉を拒むのは、教官だけではありません。社会に出たがらないタイプの学生は増えております。そして、社会に出たとたん会社に辞表を出すという学生が増えており、文部省としても対策上インターンシップを導入しようとしています。インターンシップは医学部では勿論、工学部でも工場実習はあたりまえであります。文化系では難しいのですが、これを実現しませんと文部省の見込みが悪くなります。足手まといにならないような学生を送りたいと思っておりますが、タダ働きの丁稚奉公の経験をほんのちょっぴりさせてやっても良いという会社がありましたら、われわれとしても展望が開けてまいります。ぜひご検討頂きたいと存じます。とりとめのない愚痴話になってしまいましたが、ここいらで私の現状報告を終わらせていただきたいとぞんじます。

せっかくの楽しいパーティーで、暗い話をして申し訳ありませんが最後に一言。ただ私達にとって同窓会は、従来ただお金を無心するときにだけ重要な存在でした。正直なところ、そんな感じでした。脛の太い親父さんでした。それも金を出しても口は出さない寛大な親父さんが良いお父さんでした。これからは旧態依然たる国立大学から脱皮を図ろうとしております。価値あるご助言と絶大なる精神的ご支援をお願い申し上げます。

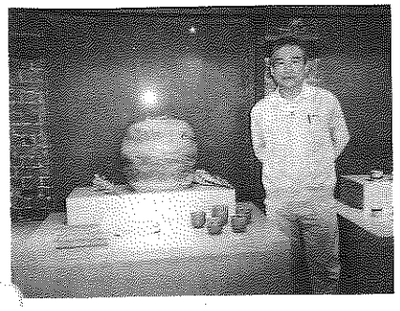
特集　21世紀を生きる

陶芸家を志して

（大9）清水吉男

陶芸（以下焼き物）を習い始めて五年になります。

一年目は、瀬戸市にある愛知県立窯業高等技術専門校で、窯業学概論、中国陶磁史等の理論から、土練り、成形、焼成、窯出しまで、焼き物づくりのフルコースでした。この先三十年を好きな道に行きたいと思い、これまでの人生の中から厳選したお好みのメニューでしたが、あっという間に一年が過ぎ、消化不良で賞味するどころではありませんでした。そこで、もう少しじっくりと土味や焼き方などを味わいたくなり、二年制の岐阜県立多治見工業高等学校陶磁科学芸術専攻科へ進みました。



この三年間は、授業のかたわら、焼きものの歴史資料を展示する愛知県や岐阜県の陶磁資料館をはじめ、焼きもののメッカと称される中国江西省の影徳鎮、上海博物館、台湾の故宮博物院、韓国慶州博物館及び民俗工芸村等を訪ね、また日展、日本伝統工芸展、朝日陶芸展、国際陶磁器展美濃等々を見学し、焼きもののふるさとである常滑、瀬戸、美濃、越前、万古、伊賀、信楽、丹波、備前等々を手当たり次第に尋ねる焼きもの漬けの日々でした。焼きものは、人々の生活と共に生まれ、洋の東西を問わず実用、建築、美術工芸品などが各国、各地で作られ育ってきました。それぞれ色彩も異なり味わいも深いことを学ぶうちに、少しずつ自分の好みの色や形、焼き方なども絞られてきました。

そこで四年目は、好きな『白化粧に火色が漂う温ったかみのある模様』を出したくて、常滑市にある共栄窯セラミック・アート・スクール特別研修（専門家養成）コースに入り、学びながら焼いてみました。初めは火色とは程遠いダークグレイばかりでした。それでも、トライ最後の五回目の窯で薄い紅斑が現れたものもありましたが、満足のいくものではありませんでした。結果はとにかく本当に嬉しかったのは「やっと一人でプランを立て、成形から本焼きまでやった」という充実感でした。その晩は、狙い外れでも愛着のある徳利とぐい呑みで一杯やりました。狙って狙った色が出せればプロだわね、と思いつつ。

再見

二十一世紀は中食産業

（大13）尾形榮一

今私は、流通産業の最先端をいくコンビニエンスストアー（以下CVS）を主たる取引先に、弁当、サンドイッチ、惣菜等を製造・販売する会社に勤めています。

CVSの主利用客は十代、二十代を中心にした若者層です。以前私は富山県にある会社に出向し五年ほど単身赴任していました。初めは近所のスーパーで自炊用の食材を購入していましたが、経験された方も多くおられると思いますが、スーパーで販売されている商品は単身赴任者用には少し量が多すぎ購入した食材の三十％位は冷蔵庫からゴミ箱のルートをたどっていました。そんなある時CVSに入ってみると個食用の少量パックの食料品がこれでもかと並んでいるではありませんか。しかも調理済みが大半です。以後名前のとおり実に便利に利用していました。しかし店の客は二十代位までの若者が九十％以上を占める状況でした。

ところでこれから二十一世紀に向けて確実に変化が進んでいく社会現象は高齢化と女性の社会進出です。

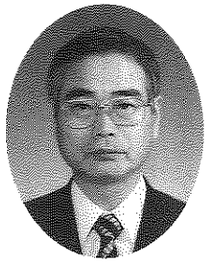
今お話ししたCVSは若者をメインの客層といいましたが、便利さを売り物にするCVSが、これからますます増加する高齢者層にターゲットを当てないはずはないと思います。今我々が若者向けにしている商品開発から、高齢者を意識した商品開発に力を入れていくことにより大きなチャンスが生まれると思っています。

一方女性の社会進出に伴って今よく耳にされると思いますが「中食」といわれる部分のビジネスがもっと大きな進展を見せるであろうと思っています。この二、三年日本でもHMR（ホーム・ミール・リプレースメント）といわれる中食産業がどんどん成長しています。家庭で食材から加工して食するのを「内食」、ファミリーレストラン等で完全に調理済みの食品を食するのを「外食」といいますが、一時破竹の勢いで伸びた「外食産業」にも今やその勢いがなくなってきており、今やこの「中食産業」が最も注目されています。女性の社会進出で家庭で調理する代わりに今までのただ調理しただけの食品からより質を高めた惣菜を初めとする食生活提案型のこの「中食」部分が注目されているわけです。

我々は、弁当、サンドイッチ、総菜等を柱にする企業としてこういったトレンドをうまく利用し、二十一世紀に向けてしっかりとした開発力を養いながらビジネスチャンスを狙っている今日この頃です。

ニーズに応える損保事業

（大13）近藤達也



一九六五年に三井海上（当時の社名は大正海上）に入社し、現在も現役で損害保険事業に携わっています。

二一世紀を目前にして業界事情も複雑になっています。九八年七月に半世紀ぶりに保険業法が改正され、大幅に規制が緩和され自由化に突入したからです。

その後の損害保険事業を巡る変化は目が眩むばかりであります。一番私たちに身近な自動車保険一つをとってもわずか一年の間に大変貌を遂げ、今や同じ内容・料金の商品は一つもないといっても過言ではありません。火災保険やその他の保険についても同じです。

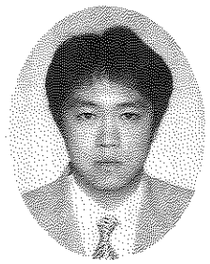
また別の面での大きな変化は損害保険への新規参入の波であります。数年前までは二十社あまりであったのが今では三三社が日本損害保険協会に加盟していますし、そのほかに三十社の外国保険会社が日本で営業を行っています。この傾向はさらに増加する方向にあります。例えば今年の九月にはソニーが新しく損害保険事業に参入しましたし、近い将来は銀行や商社も仲間入りすることが確実視されています。

しかしこう見ますと、損害保険事業も当然のことながら他の金融事業と同様に二十一世紀初頭に向けての大変動の波にもまれており、今がその前哨戦といえます。幸いにも金融事業の中で唯一バブルの大打撃を免れた損害保険業界ではありましたが、金融ビッグバンの本当の衝撃波はこれからとの感がします。今後二、三年の内には損保事業も他の金融期間同様再編は避けられず、一旦増えた損害保険会社も再編の中で消滅するものも出てくると考えられます。

損保事業の将来は非常に厳しいですが、損害保険そのものの社会的意義が薄れるものではなく、かえって社会の複雑化・グローバル化の中でその必要性は高まると考えられます。私も私の会社が二一世紀も堂々と生き残って社会的ニーズに応え社会の役にたてる損害保険事業でありつづけられるよう微力を尽くしたいと思っています。

21世紀に生きる

（大43）杉崎弘二



あと一年半後には21世紀が到来します。新世紀の担い手として、働き盛りの30代を迎える我々の世代は、目前に数々のチャンスが待っていることだと思います。想像に難くないことの一つとして、情報化の進行に伴い日本人の日常生活はより快適で便利なものへと発展を遂げていることでしょう。その反面、現在では想像もつかないような問題が発生し、またそれを解決する手段や方法が生まれて行くことだと思います。我々は変貌を遂げていく日本経済の中で新しいビジネスチャンスに恵まれることであろうと確信しています。私がなぜそのように感じられるかといえば、私自身が変わり行く金融業界にあって、また本当に変えていこうとしている外資系企業で働いている為かもしれません。

私は仕事がら度々中小企業の役員の方とお話しする機会に恵まれます。皆さん判で押したかのごとく「いつになったら良くなるだろう。」と言われます。私はそうではないと思います。「いつになったら良くなる。」のではなく、「これから良くしていく。」これが本当ではないのかと思います。また、自分と同世代の人とも将来のことについて話します。彼らもまた、「これからどうなるのだろう。」と言っています。そうじゃないのです。「これからどうしていく。これからどう考えていく。」かなのです。私は今回のテーマ「21世紀に生きる」をいただいたときどうしても伝えたいことがありました。それは、21世紀を生きる我々の世代が日常の生活に目を奪われるあまり、忘れがちになっている無限の可能性やチャンスにもう一度目を向けようではないかということです。戦後、見渡す限りの焼け野原であった日本を先人たちは希望を捨てず夢に向かってただひたすら走り続けられました。その結果が、日本をこれだけの経済大国に押し上げる原動力になったのです。我々もそういった先人たちからバトンを受け取って、これからの日本を築き上げていく時が、今まさに来たのではないかと思います。

目前に迫った21世紀をしっかりと見据えながら、大言壮語かもしれませんが我々の世代が諸先輩の方々に安らぎと休息を与えることができるような時代にしていきたいと考えています。

紹介・熱血漢

母校への情熱に燃える ラグビー部監督

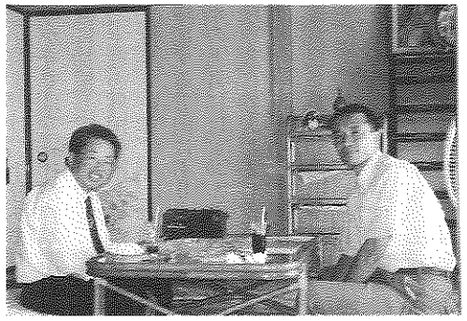
山田康裕さん（大31）はラグビー部のOBで名古屋支部の会員、税理士をしながら母校の監督を努めています。陵水ラガークラブ名古屋支部長の岩田政三さん（大17）に訪ねていただきました。

岩田支部長〈平素は母校ラグビー部の監督としてご指導いただきありがとうございます。ラグビー部のコーチになられた経緯からお聞かせください〉

山田監督「昭和五八年に大学を卒業し、父の開いていた税理士事務所に入ったのですが、公認会計士の資格を取るために大学院にも入学しました。大学院の学業は週三日ほどで時間には余裕がありましたので、空いた時間にラグビーをやりたくなったのです。近くに適当なクラブがなく結果として母校のラグビー部の練習に顔を出し、後輩の練習に加わるということになりました。卒業後一年目でしたので単なるラグビー好きの先輩として練習を指導したのですが、一年後輩の三二回卒生を中心としたチームがリーグ優勝しました」

〈リーグ優勝がコーチになる動機になるのですね〉

「上のリーグに昇格できることになりました。そのときの喜びを共にできたので、二年目以降もう少し応援してみることにしたのです。以後若手OBの一人としてコーチングを見ることになり、アドバイスや技術的な指導を続けながら、コーチになってしまいました」


岩田支部長（左）と山田監督

〈三神監督との関係は〉

「結婚することになり三神先生に仲人をお願いしましたら、大学院での勉強をしながらラグビーの指導を本格的にやらないか、と言われました。それからは、三神先生のお宅にお邪魔してラグビーの理論面と技術面での勉強をさせていただき、コーチング論を教わりました。ひるがえってみますと、学生時代は盲目的に練習を行い身につけたラグビーでしたが、先生のもとで指導を受けるようになってからは理論で裏付けられたラグビーに変わりました。まだこの時期には時間的に余裕がありましたので、ラグビーに集中できたのがよかったと思っています」

〈金銭的にご苦労されたのでは〉

「時間はありましても経済的にはいろいろありました。収入の確実なものがありませんでしたので。自宅のある清洲町から彦根まで、高速道路は使いませんでしたので片道二時間かかりました。往復に大事な時間を取られました。しかし、個人的にはラグビーに触れていたいという情熱がありましたので、毎週二回の往復を中断することはありませんでした。三神先生との話し合い、あるいはそれ以後のお付き合い、大学の後輩や同期の仲間とのいろいろな接触が情熱の素になっています」

〈最近の大学生の気質といいますか考え方はどうですか〉

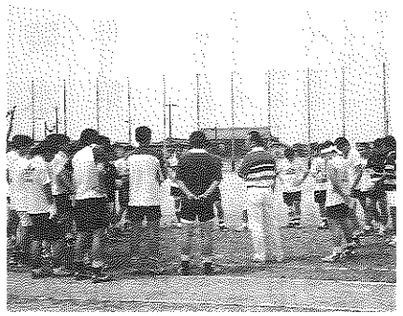
「私たちの現役時代は滋賀大学経済学部の在籍学生数が少なく、しかもスポーツクラブがたくさんありました。したがって、たいていの学生がどこかのクラブに入っていました。しかし、みんなが高校時代からのスポーツ経験があるわけでもなく、体格的に決して恵まれた人ばかりではありませんでした。ボート部やヨット部が割合強かったのですが、ラグビーはそれほど強いクラブではありませんでした。ただ学生の出身地が全国的に広がっていたために下宿生の割合は高くなっていましたので、クラブ活動は生活の一部として理解されているクラブであったと思います。最近の学生がどうのこうのといわれるようですが、ラグビー部に入ってやっている学生については特に現代っ子という特別の面があるとも思えませんね」

〈OB会との関係についてはどうお考えですか〉

「大学全体として考えてみれば、ラグビー部はOB会（陵水ラガークラブ）の組織が非常にしっかりしています。現在全国に約三百五十名ほどの会員のかたがたがみえますが、毎年一回五月三日の日に彦根に約百名のOBの方が集まり、『頑張れよ』と声を掛けてくださいます。会費として多額の援助をいただき、クラブの道具、ユニフォーム、ボール、タックルマシンなどを購入していただいております。その点では、他のクラブに比べて非常に恵まれていると思います」

〈山田さんがコーチするようになってから、理論に裏付けられた技術が現役に伝わり、技術レベルでの上昇が見られます。その結果OBの期待する結果が出るようになり、多くのOBが彦根に足を運び、従来にも増して気合をいれるようになったのです。仕事と母校のクラブのコーチ（現在は監督）を十六年間、週二回にわたって続けられたことに対して陵水ラガーは大変感謝しております。仕事とコーチの比率はどのようにされていますか〉

「基本的には父の経営する税理士事務所の所属税理士として勤務していますので、仕事面では父に世話になっている割合が少なからずあります。仕事が税理士ですから時間的には自由時間が取りやすく、コーチングの時間を作ることができました。平日一日、週末一日と決めて彦根に通っています。一週のうち二日の彦根行は生活のリズムに組み込まれてしまい、かえってメリハリのある生活をしていますね」



〈コーチ、監督で十六年ですね〉

「当初は自分自身が現役時代に一緒にプレイした後輩でしたから、一緒にプレイしながら指導できました。その次の十年目位までは若年OBのコーチングとして接触しましたが、この時期は学生との間に十分なコミュニケーションを持つことができなくなりました。それで三神監督に指導を受ける中で、コーチングの実践をやりました。文字通り三神監督のサポーターとして動いていました。十年目を契機にして三神監督の方が忙しくなり、私が三神監督と学生との間の意思伝達のパイプ役になりました。OBの一会員ですのでOB会の情報を得ることも容易ですし、現役チームを代表して学生の希望をOB会に早く伝えることもできます。OB会が効果的な援助をタイムリーにできる面で多少はお役に立っているのではと思っています」

〈最近の成績は〉

「関西リーグにはABCDの四段階があります。Dリーグの京滋リーグで、毎年優勝又は準優勝の地位を保っております。今年こそCリーグ昇格を実現したいと思っています」

〈学生を指導されていろいろ経験されましたね〉

「個人主義の強い現代の学生を、団体競技の最たるラグビーに熱中させるために苦労もしました。実際にはクラブの意義についての認識が変わり、楽しめればよいとの発想で集まってくるのが多くなりました。結果、サークル数が増える一方で一サークル当たり学生数が少なくなっています。必然的にチーム競技のサークルは減少します。団体競技として最も個人主義が要求されるラグビーですから、ビデオを見ながら研究する機会が多くなっています。四年間にどのようなプレイをするのかを考えさせ、実行させるようにしています。これは学生自身の問題です。しかしそれをサポートし、アドバイズするのはコーチや監督の仕事だと判断して学生と接触しています。」

〈ご自身がサポートされている面もたくさんありますね〉

「仕事の処理を代わってやってくれる父には、監督を辞めるときにまとめて借りを返すつもりですが。結婚する前からコーチでしたから、理解とか了解とかの段階ではなく生活の一部として、妻には協力し行動してもらっています。子供達も滋賀大学のグランドで遊ばせてもらったり、時にはマネージャーの皆さんにお守りをしてもらったこともあります。家族全部がラグビーに親しむことになった今では、ラグビーが家族の絆になってしまいました。秋にはラグビーシーズンが始まりますが、子供達も心待ちしているようです。最後になりましたが、山崎会長を始め陵水ラガークラブの諸先輩方には暖かく励ましていただいております。私の心の支えになっていることを感謝いたします」

名古屋陵水句会

職さがす友と出会へり青葉木菟　大鮑身をくねらせて神の前
爽竹桃主なき家を隠しけり　青汁を垂らして鮎の焼上り
熟れを待つ銀杏たわわ修道院　柴　宗平　大五

盆法話賽銭箱にもたれつつ　驟雨来てラヂオ体操散りにけり
せせらぎに尾を打ち止まぬ鬼やんま　ヘルメット紐の食ひ込む防災日
みんみんや赤児抱き来る朝の弥撒　石橋政雄　大六

巻きぐせはそのままに吊る初暦　奥志摩の風の冷たき桜かな
ゆるゆると舟が舟曳く花曇り　雨脚に色の浮きたつ濃紫陽花
初夏の空へ網打つ川漁師　名倉昭弘　大六

色のなき風に出でたつ荘の客　山百合を囲む拓夫のティタイム
傍らに犬待らせて草泊　花蕎麦のうねりの中の童唄
橋渡りゆくや胡弓の風の盆　斉藤武司　短二

晒菜升麻霧の奔流渦なせり　登り来て霧の中なる昼餉かな
山肌の崩るるあたり鳥兜　弥撒終へて瞳涼しき司祭かな
虫鳴くや父母のこと寝語りに　伊與正道　大六

月光にフォーレの調べ白ワイン　満月にうかぶ屋根に猫のかげ
台風すぎ雲きれぎれに中秋の月　大学八回　吉田正克

陵水亭

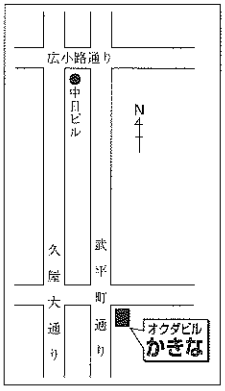
毎月第三土曜日に開催

幹事長　吉田正克

陵水会員が毎月一回集い、飲み、語る会です。岡田支部長の発案により、一昨年スタートし三年目になります。高商から新卒までが集まり楽しくやっています。年齢を越え、喧々諤々またときには生真面目に日本の将来を語ったり、彦根の思い出を語ったり、はたまた女性の話と論客が多く話題はつきません。毎回十五名程度集まっています。一番の先輩は杉浦弘（高商二一）さんから若手では本年卒業の長崎豊さんまで幅広くおいでいただいていますし、支部長の岡田一さんは皆出席です。

初めての方も一人で、あるいは同期生を誘って気軽にお越しください。次回の開催は次の通りです。

日　時：11月20日（土）18時より
場　所：四季料理かきな
中区栄5－4－3
栄オクダビル1F
TEL242－0331



収支報告

平成10年度
陵水会名古屋支部収支報告書

自　平成10年3月1日
至　平成11年2月28日

収入の部	(円)	支出の部	(円)
前年度繰越金	2,329,526	平成10年度総会費用	2,316,152
平成10年度総会会費	1,660,000	「名古屋陵水」発行費	277,450
平成10年度支部会費	704,000	会議費	166,204
本部より補助金	201,000	交際費	61,500
雑収入	62,814	活動補助金	31,000
		事務費	79,650
		雑　費	4,030
		次年度繰越金	2,021,354
	4,957,340		4,957,340

ALICO Japan
名古屋ファーストエイジェンシーオフィス
チーフコンサルタント
杉崎弘二（大43回卒）
アリコ ジャパン
アメリカン ライフ インシュアランス カンパニー
AIG
A Member Company of
American International Group
〒450-8570 名古屋市中村区名駅4-5-28
近鉄新名古屋ビル8階
TEL 052-566-3931 FAX 052-566-3993
携帯 090-8541-6258

株式会社ジャパンフレッシュ
代表取締役社長
尾形榮一
（大学13回卒）
〒456-0032 名古屋市熱田区三本松町18-43
tel.(052) 882-6501 fax.(052) 872-1273

「陶芸仲間の会」第7回展
日時：平成12年5月9日～14日
場所：名古屋市民ギャラリー
第2展示室
（中区役所・朝日生命共同ビル7F）
清水吉男（大9）